

(二)

あのラッパ形から吹き出て来るのはもちろん、耳へ当て、聴くのも、ほんたうの音楽の情調はラジオでは完全に受け取れない。一中節、河東節、箏曲、長唄、其他いろ／＼と折にふれて聴いてみただけ、ラッパ形の方は声が割れたり、蟬のやうに鼻にか、つたり、楽器の三味線も響きが高過ぎて乱れる。それが、耳に当て、聴く方になると、余程緩和されるけれど猶申分がある。とにかく往來に投げ出されてある鉄管を通して向ふの明るみを眺めるやうで鮮明に全情調の豊かな気分が明るく感じられない。ことに落ちついた、寂びのある一中節や河東節ときたらとてもいけない。尤も、一中や河東をラヂオで聴くといふことが間違つてゐるのだけれど、亡び行く芸術は殊に懐しいので、番組の夜に人の家で聴いたのであつて二度は聴きたいと思はぬ。——河東節の如きは故人になつた秀翁やおやすや、それから生きてゐるかどうか知らぬが藤岡のおていなどが屢々私の宅で聴かしてくれたあの大江戸の純美な声調をホ、ほんたうにホ、ラヂオが伝へ得たところで、それで音楽通になられては困る。——が、不完全でも漫然と懐しい情緒をそ、られるだけは嬉しい。で、九月十八日の夜の番組に、海野厚作歌、小田島樹人作曲といふのが目について、其晩近所で聴いた。海野君作三つの内では、樹人君の作曲オモチャのマーチといふのが変つた調子で大変面白かつた。樹人君は俳人だけによく私の作意を了解してくれるが……と海野君が云つてゐた。けの事はある。然し、もし海野君が生きてゐたら、「ラヂオにか、つてはひどいもので恐縮です」と、自分の作歌に対する作曲一つでもツブシ気に入つてゐなかつた故人はキツとさういつて例の苦笑を洩らしたことであらう。又おもふ、俳句に文章に十分天分を持つてゐた長頸子君が、童謡に於てラヂオに酬ら

れやうとは実に意外であつたらう。十八日の夜は天外遙かに無線の唱歌を聴いて、やっばり例の苦笑を淋しく洩らしたに違ひ無い。

(曲水10—11)

■昭和49年

追悼のことば

(50回忌法要における曲水社代表による)

全国民によつて広く愛唱されている「背くらべ」など多くの優れた童謡を作詞した海野厚一君が、豊かなる詩才を秘めて二十八歳の若さで逝去されてから本年は五十回忌となります。本日、その逮夜に当り、法蔵寺の浄域において、御遺族により厳かに御法要が営まれますにつき、御町重なるお招きにあずかり、御焼香出来まことは無上の光栄と感謝する次第です。

故人は大正四年十八歳の頃遊学のため上京されたが、その時既に長頸子と号して俳句をよくされ、当時「智仁勇」俳壇を担当していた渡辺水巴の選を乞うていました。大正五年十月水巴が「曲水」を創刊するや直ちに同志数人(寒燈会)と共に参加して、編集、事務等水巴の手助けをなすと共に、芸術上においては水巴の提唱する主観的俳句観の実践を行ない、創刊期の曲水の推進力となつていた事は曲水の歴史の上に明らかどころであります。

長頸子君の曲水在籍は八年七ヶ月程の比較的短期間でありましたものの、その間俳句、文章等に独自の芸風を示して死の数か月前まで活躍されたことは、寔に痛ましい限りでした。又、曲水の幹事として編集に携わり、課題句選者として後進を指導される等創刊後の